

神庭重信（精神医学）

マクヒュー/スラヴニーの著書『現代精神医学』（みすず書房、2019年）は、久々に読み応えのある精神医学のテキストであった。著者らは、精神疾患として一括りにされている疾患群に4つの分類モデルを適用し、それぞれの分類に属する疾患に共通する成り立ちと治療の要素を抽出している。以下に、そのさわりを紹介する。

(1) 精神疾患の中には、病因が身体組織に同定される病理的過程（現在は未確定であっても）を生み、臨床症状として現れる疾患がある。たとえば、統合失調症や双極性障害がこれに該当し、身体医学の言語、すなわち疾患、症状、病歴、機序、原因などで理解することができ、治療には身体疾患に準じたアプローチが可能である。(2) 身長のようにある集団内で一定の分布を示すヒトの特質があり、それが平均値から大きく外れているために障害につながっているものがある。知能（ただしダウン症など原因がはっきりしている場合は除く）、気質、パーソナリティの問題がこれに該当する。患者が抱える障害は、患者の持つ特質（弱み）が現在の生活環境との間で起こるものである。したがって、人の行動の意味を理解し、説得、明確化、解釈という技法を用いて、より適応的な方向へ導く対応が相応しい。

(3) 物質使用障害、行動嗜癖、神経性やせ症、パラフィリアなどの精神疾患は、患者はそれを「もっている」のではなく「している」、つまり行動の障害なのである。治療の要点は、行動への渴望を緩和し、患者が他の行動を選択できるように援助することである。そして

(4) が「生活史の観点」である。生活史は、落胆、失望、心配、葛藤などの心理状態を、患者の背景—因果的連鎖—結果として説明するだけでなく、その個人について多くのことを教えてくれ、精神療法の材料を提供する。

マクヒュー/スラヴニーの4つの分類モデルは、ヤスバース/シュナイダーの古典モデルを含みながら、脳科学、遺伝学、生理学、行動科学、心理学などにわたる知見を動員して緻密かつ明解に説明されている。しかもその分類の定式化からは治療の基本要素が説得力をもって導かれており、実践的なテキストに仕上がっている。